

◆『Intelligence』購読会員の皆さまへ:ニュース・レターNo.50(2017年11月号)◆

寒暖の差が大きな毎日が続いておりますが、みなさま、いかがお過ごしでしょうか。現在、次号『Intelligence』第18号の発行に向けて、編集委員会では順調に編集作業を進めております。来春、お手元に届きますことを楽しみにお待ちしております。

ご愛読の会員の皆さまには、ニュース・レターとともに「Intelligence」会員専用ウェブサイト <http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> また、会員向けブログとあわせてご覧いただければ幸いです。皆さまからのご意見、ご要望をお待ちしております。

【ブログ用エッセイ募集】

会員向けブログでのエッセイは、すでに第20回を重ねております。このブログのエッセイの執筆希望者を、購読会員の中から募っております。研究に関する小話やヒント、資料紹介などを会員向けブログに掲載なされたい方は、お原稿をお待ちしております。原稿の長さは千字程度、写真を二葉そえてご提出下さい。詳しいことは、事務局までご連絡下さい。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【第114回研究会】(10月28日(土)午後2時30分～5時30分)

①神岡理恵子(早稲田大学文学学術院総合人文科学研究センター招聘研究員、新潟県立大学非常勤講師)「戦後ソ連におけるサミズダート／タミズダートについて—非公式文学／芸術分野を中心に—

ソ連の雪解け前後に始まる地下出版、国外出版について、雑誌、レントゲンフィルムを利用したレコードのコピー、パフォーマンスなどの資料に基づいてご紹介いただきました。地下出版のデザインと1920年代ロシアアヴァンギャルドの連続性や、イスラエル、アメリカ、フランスなどを拠点にした国外出版のネットワークなど、示唆に富んだご研究でした。

②前島志保(東京大学大学院総合文化研究科)「19世紀後半から20世紀前半における視覚表現による報道媒体：日本と欧米の場合を中心に」

本発表は、1920年代から30年代にかけて展開された、日本と欧米における写真報道定期刊行物の発展と普及度の相違点を明らかにすることで、日本の視覚表現が持つ特徴とその変容を比較文化的な手法に基づき、巨視的に浮かび上がらすものであった。特に写真の持つリアリズムが西洋のグラフ雑誌では中心的な役割を果たしたのに対し、日本ではすでに近世から発達した錦絵に連なる画報誌との連続性が重要となることが強調された。

③芝田正夫(関西学院大学名誉教授)「英国における「知識への課税」(スタンプ税)廃止の背景」

本発表は、18世紀から19世紀にかけて、イングランドの間接統制段階における、スタンプ税(印紙税)廃止の背景を扱ったものである。17世紀、国家からの直接的な弾圧・統制の時代と比較し、社会史の観点から、この税の廃止過程が、都市労働者対策としての教育であり、社会改良政策であったことを紹介した。また、その後スタンプ税廃止にともなって、『デーリーテレグラフ』『デーリーメール』などの大衆新聞の時代を招来した。このように、国家権力からの「言論自由の獲得」史観を批判的にみること、また日米英での新聞・読者の「大衆化」成立時期を比較史的に扱うことで、従来のイギリス新聞史観を相対化できることを指摘した。

なお、研究会当日に配布されたレジュメは、会員ホームページにアップされています。<http://www.bunsei.co.jp/ja/intelligenceuser.html> をご覧下さい。

【シンポジウム:上海師範大学ワークショップ報告】

2017年11月4日(土)に上海師範大学徐匯区キャンパス文苑楼708会議室で、師範大学と共同開催で、上海ワークショップ「日中戦争をめぐる報道と宣伝及びインテリジェンス」を(中国語訳は「抗日戦争時期媒体報道与宣伝活動」)開催した。上海師範大学の蘇智良教授

と 20 世紀メディア研究所所長の土屋が挨拶した後、午前中の Session 1 では、1) 土屋礼子 (早稲田大学)「日中戦争開始期の中国における英国および日本の宣伝活動」、2) Shuge Wei (オーストラリア国立大学)「戦時下中国におけるプロパガンダ機関と租界新聞」3) 山本武利 (早稲田大学名誉教授)「中国人女性を使った日本軍のインテリジェンス工作」4) 呉俊範 (上海師範大学人文伝播学院 副教授)「『戦時妻』に関する戦後の世論と社会影響」の報告があり、蘇教授が論評を行った。昼食の後、蘇教授の案内で、キャンパス内にある慰安婦の記念像を見て写真撮影し、中国慰安婦博物館を見学した。

午後の Session 2 では、1) 前島志保 (東京大学大学院総合文化研究科准教授)「戦間期および戦中期の『主婦の友』における報道写真記事」2) 曲揚 (早稲田大学大学院博士課程)「日中戦争時の電通発行の中国語雑誌について」、3) 郑炆 (上海師範大学講師)「国策の実施貫徹、個人的な理想と『中華電影』—1939 年川喜多長政の上海赴任とその始末」、4) 江文君 (上海社会科学院日本研究所研究員)「自由職業団体と近代上海におけるナショナリズム実践」の四報告があった。次いで、休憩を挟んで、Session 3 では、5) 姚霏 (上海師範大学人文伝播学院 副教授)「戦時の宣伝画における女性イメージ」、6) 劉茜 (早稲田大学大学院博士課程)「日中戦争時の中国内陸部における日本軍による宣伝ビラ」の二つの報告があった。

いずれも日本語、中国語、英語に翻訳通訳され、三カ国語が飛び交う中での国際シンポジウムは、日本語／英語通訳の鈴木貴宇先生 (東邦大学准教授) をはじめとしたご尽力を頂き、準備も大変であったが、上海師範大学の陳雅賽副教授の采配によって成功裏に終わり、人的交流も含めて大きな収穫のあるものであった。

### 【コラム:ロシア革命百年にまつわるメディア研究動向】

このメールマガジンが出る頃、世界初の社会主義国家の誕生につながったロシア革命から、11 月 7 日でちょうど 100 年となる。本研究所としても、月例研究会や研究誌『インテリジェンス』で、随時、関連テーマに取り組んでおり、土屋礼子所長からも在外研究先での研究動向を編集委員会に伝えて頂いている。筆者の専門とするメディア史研究においても、ソビエト・ロシアの新聞史、出版史、放送史などの研究知見はこれまでも積み重ねられてきており、また文学、歴史の分野でも表象分析、一次資料による実証研究が行なわれてきている。

本研究所が取り組むスタンスからは、プロパガンダ、検閲、インテリジェンス(諜報)に関連した研究において、今後このような研究を期待したいという点から、個人的見解を記してみたい。

例えば、プロパガンダの関連では、VOKS (Vsesoiuznoe Obshchestvo Kul'turnoi Svязи s zagranitsei、ソ連対外文化連絡協会)は、革命後の文化外交機関として、ちょうどアメリカのUSIA (United States Information Agency、1953-1999)とのカウンターパートにもなるかと考えられる。同協会はソ連の対外宣伝としては、海外では、日ソ協会、朝ソ協会、イギリスなどにも文化友好団体があり、ソビエト研究者・富田武史の著書『戦間期の日ソ関係』(岩波書店、2010 年)でも補論的にふれられているだけである。またラジオによるプロパガンダでは、モスクワ放送の実証研究も出てきてほしいところである。

また、検閲との関連では、10 月の月例研究会で、神岡理恵子氏が果敢に取り組まれたソビエト時代の地下出版(サミズダート)について報告していただいたが、その内実を問う作業はこれからともいえる。

その上で、インテリジェンスまで手を広げるとなると、どのような情報がメディア等で報じられなかったかという、オープンソース情報の裏面にあるインテリジェンスは、やはり、情報のさまざまな妖怪変化に満ちた、魍魎魍魎の世界であり、テーマの広がりは無限にあるだろう。

いずれの研究テーマに取り組むにしても、ロシア語の語学力が不可欠であることは論を待たない。現在、ロシアの公文書館で資料調査にあたるとしても英語だけでは通用しない。これは、中国研究などでも事情は同様だろう。

先人研究者の云いの如く、プロパガンダ、検閲、インテリジェンス研究は、やはり疲れるのである。

[11月10日付 文責:吉田則昭]